

1970 年の大阪万博と現代音楽へのレガシー

白石美雪（武蔵野美術大学）

55 年前の大阪万国博覧会と音楽と言え、当時を経験した 60 代以上の世代では、三波春夫や坂本九らが歌った「世界の国からこんにちは」（島田陽子作詞、中村八大作曲）がすぐに想起されるようだ。一方で、太陽の塔に象徴される現代芸術との関連するアカデミックな研究では、暮沢剛巳、江藤光紀著『大阪万博が演出した未来（前衛芸術の想像力とその時代）』（青弓社、2014 年）では「大阪万博が前衛芸術の祭典であった」ことが強調され、榎木野衣の『戦争と万博』（美術出版社、2005 年）では国策だった万博と「前衛芸術」の姿勢に齟齬も指摘され、問題としての万国博覧会が浮上していく。

今回の問題提起の前提としては、2023 年から当時の鉄鋼館の企画実現スタッフの一人であった船山隆（東京藝術大学名誉教授）の呼びかけで、音楽研究者による共同研究が開始したことがある。井上さつきが発見した武満徹「大阪音楽堂運営試案」（手書き文書）を契機に、既知の資料群にある「音楽堂」構想を再評価する契機となった。万国博覧会と現代音楽が結合する国際動向は、ブリュッセル万博のフィリップス館で実現された「機構」とモントリオール万博での「環境芸術としての万国博」という理念があり、大阪万博に向けては大原総一郎の「立体音楽堂」構想や、武満徹へと引き継がれた「スペースシアター」（万博記念公園の EXPO'70 パビリオンに現存）へとつながるのである。

大阪万博は 1970 年代の世界的な現代音楽の高揚期を象徴するもので、それは行列をなす大衆的な広がりには享受された。そして、多くの文書類が意識的に保存と公開がなされ、開かれたレガシーとしてアカデミックな批判的検証に提供されている。あらためて歴史的事象としての万国博覧会を論じるときに、この EXPO'70 を一つの典型例として考えたい。